

海の向こうにでて見れば

(5) 海外の日本人“村”社会

石田 佳子

一概に「海外に住んでいる」と言っても、現地の人々に溶け込みなじんで暮らしている人だけではなく、日本人とばかり交流しながら暮らしている人、ほとんど誰とも交流せずに暮らしている人など、その暮らし方はさまざまです。とりわけ海外に住む日本人には、「日本人“村”社会」と揶揄されることがあるほど特有のコミュニティを形成する傾向があるため、今回は自分の経験も含めてマレーシアの日本人（主に退職者の）コミュニティについて考えてみました。

永住でなく長期滞在

昨年の外務省の調査によると、現在マレーシアには約2万2千人の日本人が住んでいます。そのうち永住者は約1千6百人だけですから、それ以外の約2万4百人の日本人は、一定期間（短期～長期）のみマレーシアに滞在している訳です。つまり、現在マレーシアに住んでいる日本人の約93%がこの国に生活基盤を築いて永住するのではなく、いつかは日本やその他の国に移り住むため日本社会や日本人の動向を視野に入れて暮らしていると思われる。

私の住むクアラルンプールにも多くの日本人が滞在しています。留学や仕事（自営、駐在）などその目的がはっきりしている場合には、学校や職場との関係で住む場所が限定されることもあるでしょう。しかし、そのような制約がないはずの退職者でも、日本人の多い地域やコンドミニアムに住み、日本人との交流を主としていることが多いのです。日本人同士でつきあい、日本のテレビ番組を観て、（割高な）日本食を食べていたら、日本で暮らすのと余り変わらない気もしますが、海外でもそのような暮らし方をするのは、なぜなのでしょう？

日本人同士でつきあうメリット

海外に住んでいる日本人同士が交流し合ったりコミュニティを形成するメリットは、言葉や立場を同じくする者同士で「わかり合える」こと、困った時に「助け合える」ことでしょう。特に移り住んだばかりの場合は、日本との違いに戸惑うことも多いため、現地の生活に慣れている日本人の隣人の存在はありがたく心強いでしょう。また、言葉の壁を乗り越えられない場合は、万一の時に頼れるセーフティネットとして、日本人の隣人を作っておきたいと考える人もいるでしょう。

私の日本人コミュニティとの関わりは、ロングステイの準備段階から始まりました。現地の情報を収集するためマレーシア関連で名高い某 SNS に参加すると、急速に「知り合い」が増えたのです。具体的には約 4 年前、下見のためクアラルンプールを訪れて在住日本人（主に退職者）グループの食事会に参加した際に、初めて出会った方から夫が「自宅のコンドを見に来ない？」と声をかけられたのが発端でした。

当時は日本国内で海外ロングステイが注目され始めていたこともあり、その SNS の活動が盛り上がっていました。それはクアラルンプールに長く住むある日本人夫婦が私財を投じて運営する SNS で、元々ごく内輪の互助会的な集まりだったものが紆余曲折を経ながら組織化され、参加者数と活動範囲を増して行ったようです。

その SNS には過去の膨大な書き込みが蓄積されていたので熟読すればそのルールなどかなりの事がわかったはずですが、その存在を知り始めたばかりでまだ内容まで把握していなかった私には、初対面の人間を自宅に招いてくれる感覚が理解できず、驚きと戸惑いを感じました。

日本人“村”社会の隆起

しかし、その後その SNS に精通するにつれて、「どうやらここはマレーシアに住む（予備軍を含む）日本人同士が、“親戚以上、家族未満”のお付き合いをする場なのだ」と理解するようになりました。

主体となるメンバーたちは、やはりクアラルンプールに住み、主催者夫婦と懇意にしている人たちでした。彼らは日本人会のサークル活動やテニスやゴルフや食事会などで常に行動を共にしているらしく、まるで疑似家族のような雰囲気醸し出していました。また、彼らはその SNS に関する活動をすべて無償のボランティアとして行っていました。

その活動とは、SNS を介してロングステイ予備軍に現地の情報を提供したり、下見に訪れた人に自宅を見学させたり、歓迎会や食事会を催したり、日本各地で開催されるオフ会にまで遠征して体験談を披露したりといったことです。場合によっては、携帯電話の購入や契約に同行したり、不動産屋の紹介や家具の購入から空港・ホテル間の送迎まで、痒い所に手が届くようなサポートをすることもあったようです。

そこ（SNS）は初対面どころか面識のない者同士できえ、愛称（ハンドルネーム）や「～ちゃん」付けで呼び合う独特の世界でした。メンバーの大半が 60 代～70 代であるにもかかわらず、青春時代に戻ったかのように生き活きと遊びや暮らしを謳歌していました。また、彼らは事あるごとに主催者夫婦への感謝の意を示し、いかにマレーシアが良い所か、自分たちがどれほど幸せに暮らしているかを競い合うように口にするのでした。

日本人同士でつきあうデメリット

日本人には、我欲を抑えて他に献身しようとする傾向や、細やかなおもてなしの心（ホスピタリティ）があると言われます。しかし、そのような美徳が発揮されるのは、相手が「お客様」や「目上の人」の場合であり、相手が「身内」や「目下の人」になると、その接し方は変わり得るのです。また、「世話をやく側 or やかれる側」「与える側 or 与えられる側」といった一方通行の関係は、長続きさせることが難しく、その関係性は長期化するにつれて良くも悪くも変化するのです。

また、海外の日本人コミュニティのような狭い集団では、昔の“村”社会のような閉鎖性や排他性を帯びたピラミッド型のヒエラルキーができあがりがちと言われます。私の知る限り、クアラルンプールの日本人“村”社会に組み込まれるのは簡単で、日本人の多いコンドに住みさえすれば、定期的に催される食事会に誘われたり、一時帰国する仲間を空港まで送り届けたり、帰国する時にお土産のリストを渡されて「これを買って来てね」と指示されたりといった“役割”を担わされるそうです。また、移り住む時にお世話になったことに恩義を感じて「今度は私が“お返し”をしなくては！」と頑張るうちに、ヒエラルキー内での格が上がり、気づいた時には抜けるにぬけられなくなっていたといったこともあると聞きます。さらに、そうしたヒエラルキーの中では、認められようとして頑張る格下の者が、出過ぎることなく頑張る間は格上の者のお覚えめでたく重宝されるけれど、「“役割”を果たさなければいけない」という“（暗黙の）ルール”を破って勝手な行動をとり、格上の者の機嫌を損ねると、きついしっぺ返しを受けるようです。

前述の SNS にもそのようなヒエラルキーが存在していること、その頂点に立つのが主催者夫婦であることは、周知の事実のようでした。そしてその中での上下関係は、主催者夫婦との親しさや在住期間の長さ、前職での肩書きや財力などによって決まるようでした。つまり、仕事の能力や成果などが加味される会社の上下関係とは異なり、すべてが（主に主催者夫婦との）人間関係によって決まっているように、私には見えました。

日本人“村”社会の衰退

マレーシアのロングステイヤー（すなわち、その SNS の参加者）が激増した最盛期（3 年程前、参加者が約 2000 人を超えた）頃から、その SNS には不穏な空気が漂い始めました。以前はとても親切で親しみ易かった主体となるメンバーたちが、その他のメンバーたちに厳しく接するようになったのです。

具体的には、当初は「政治と宗教に関する話題は、ご法度」だった SNS に、いつの間にか、「主催者の意に添わないであろう話題（マレーシアやロングステイの否定的な面に関する話題や、マレーシアロングステイ以外の話題）は、ご法度」という“（暗黙の）ルール”が加わりました。また、何でも質問して良い場だったはずの SNS に、素朴な質問（過去に誰かが質問して答えを

得ているため、SNS を検索すればすぐわかるような質問) を書き込むと、叱責を受けるようになりました。さらに、たびたびルールに従わない人には、SNS からの排除(促されての自主退会や除名) という厳しい処分が課せられるようになりました。

一方、主催者夫婦の権威がどんどん増して、まるで理想の父母(兄姉) か偉人でもあるかのように奉られるようになりました。また、主催者夫婦と主体となるメンバーたちの結束力がぐんぐん増して、「介護が必要になっても、仲間同士でマレーシアのコンドをシェアして住んで、面倒を見合おうね!」とか「いっそマレーシアに日本人専用の老人ホームを作ってしまうか?」といった話題で盛り上がることもありました。

しかしながら、約 2 年前のある時を境に、その SNS 内部に亀裂が生まれました。何があったのかはわかりませんが、主催者側(につく人たちのグループ) と、主体となるメンバー側(につく人たちのグループ) とに分かれて、いがみ合うようになったのです。酷い非難の応酬や怪文書の氾濫などで一時は收拾のつかない事態に陥りましたが、最終的には、主体だったメンバーたちがごっそり SNS を脱退して行きました。その後、彼らは別の新しい SNS を創り、現在は新旧それぞれのグループがそれぞれの SNS を運営しながら活動しています。

外から見ていると想うこと

私たち夫婦は、集団行動や“(暗黙の) ルール” を課せられることが苦手なので、日本人コミュニティから離れた所で暮らしています。日本人が嫌いな訳ではなく、むしろ海外に住んでからの方がその美点を再認識していますし、個人や夫婦の単位でおつき合いしている日本人の友達はいりますが、日本人が集団になると目に見えないプレッシャー(上下関係や同調行動を当然視される圧力) を感じるが多いため、敬遠するようになったのです。

したがって、前述した SNS の件に関しても、なぜそうってしまったのか、これからどうなりそうか、といった詳しい事情はわかりません。しかし少し遠くから見てきたからこそ、この諍いで傷ついた人たちのそれぞれが味わったであろう悔しさや憤り、悲哀などに想いを馳せることができるのかもしれない。

私見ですが、大半のメンバーたちは(少なくとも最初は)、「新しく来る人たちのお役に立てるなら」とか「よりよいコミュニティを作るために」などと考えて、純粋な善意や好意から行動していたのだと思います。しかし(おそらく人数が増えるにつれて)、人間ならば誰でも抱きかちな競争心や虚栄心が膨れ上がり、大きな流れを生み出して行ったのではないのでしょうか。

光文社新書『ハラスメントは連鎖するー「しつけ」「教育」という呪縛ー』の著者(安富歩、本條晴一郎) は、ハラスメントの本質を、「相手の情動反応を否定すること」と「相手の情動反応

に基づかない意味づけを強制すること」の二点にあると定義しています。つまり、相手の意思や気持ちを無視して何事かを強要しておきながら、その行為を「あなたためだから」と正当化して善いもののように信じ込ませる（「嫌だ」と感じるべきところで「ありがたい」と思ってしまう）ようなコミュニケーションの過程がハラスメントであり、「魂の侵害/裏切り」だと言うのです。また、集団の中でこの加害者になるのは、”被害者故に加害者になった人”であることが多く、集団内に”被害者故に加害者になった人”が増えると、陰湿で排他的な空気（集団力動、圧力）が生まれ、（さしたる理由もなく）少数派の個人をいじめたり、弾き出したりしながら、誰も責任を取ろうとしない（自分の事として胸が痛まない）という結果を招きがちだそうです。

もしかすると、言葉や立場を同じくする日本人同士だからこそ、親しい間柄になるほど相手への期待や甘えが高まり、些細な事でも比較したり、嫉妬するようになるのかもしれませんが。また、日本人の作るコミュニティ（集団、組織、村、社会）というものは、常にこのようなことを繰り返しているのかもしれませんが。あるいはこれからは、最近の若い世代の日本人に見られるように、「個人」が群れずにそれぞれの場所でそれぞれの生き方を模索するようになって行くのかもしれませんが。